

2 四季折々の印象

数年前、DVDで岩井俊二監督の映画「Love Letter」をはじめて見たときの私は、まだ小樽に行ったことがなく、小樽＝雪深い、ノスタルジック、洋館、ガラス、ランプという断片的で漠然としたイメージを持っていた。昨年「小樽雪あかりの路11」の開催中に初めて小樽を訪れ、手宮線跡地などで暗がりの中、ろうそくの灯に照らされた雪がプリズムのように光輝く幻想的な様を見たときは、寒さを忘れ、何時間でもそこに佇んでいたいと思った。5月に訪れた小樽公園は、街のシンボルのツツジがやわらかな緑に彩りを添え、陽気な春を感じさせてくれた。坂の上に佇む公園から見た遠方の穏やかな海が与えてくれたのは、交通量の多い都会では味わうことができないやすらぎのひとつ。夏はアスファルトの熱気で蒸し返す東京と比べると、まち全体の風通しが良く、家々の軒下の風鈴のチリーンとなる音が夕暮れ時に、はかなくも美しい情緒を添えて響いていた。ただ、大きな心残りとなっているのは、秋に多忙で小樽に行けなかったこと。ネットで検索して見た天狗山の紅葉は、暖色の赤、茶色、黄色が混じり合っている美しい油絵のように見えた。小樽は四季折々の様々な表情を持っている。私の今の小樽のイメージには、季節ごとに面影が変わる海、山、花、樹木という項目が加わった。これからも四季折々の小樽を訪ね、さらなる土地の魅力を感じていきたい

季節ごとに書いた日記を合わせた上の文章にあるように、私は小樽の四季に得も言えぬ魅力を感じた。光と雪の反射がつくりだすもの、花や緑の彩り、海風が運ぶ情緒などに。坂道の中腹にある家の軒に下がっている風鈴の音色を聞いたとき、以下の句が頭に浮かんだ。

「海風と ともに鳴るかな 軒風鈴」(うみかぜと ともになるかな のきふうりん)

また、このとき感じたような「情緒」や先に書いた「郷愁」に加え、小樽には美しい「輝き」があるということ、滞在回数を重ねる度に実感した。小樽ならではの春の情景に出会うことを楽しみにしていた私は、昨年五月の二度目の小樽滞在中、いつもより早く目が覚め、街中の古風な造りのホテルを出た。五月晴れの気持ちのいい空の下、起伏のある坂を登ることは良い運動になり、たどりついた小樽公園では、20種7000本とも言われる色彩取りのツツジが遠方からの訪問者を温かく迎えてくれたような気がした。古風で華やかで繊細な印象のあるツツジは、小樽を象徴する花として土地のイメージによく合っている。建築にしても芸術にしても、小樽には古風で華やかで繊細な美を感じる。ツツジが華やかに咲きほころんでいたろう明治、大正、昭和初期の個人の邸宅内の庭園もさぞ美しかったのではないかと想像した。

「朝露に 輝く つつじ 薄衣」(あさつゆに かがやくつつじ うすごろも)

花びらは薄い羽衣のように繊細に見えた。

次に、夏に訪れた小樽で印象深かったのは天狗山。北国とはいえ、夏の日中はそれなりに暑く、山にはロープウェイで上ることにした。燦々と降り注ぐ太陽の光で輝く樹木を見せながら、ロープウェイはゆっくりと上がっていった。山頂に吹いていた風は清々しく、海の影響を思わせた。山の上での見晴らしの良さが気に入り、別の日には夜に上った。

そして、そのとき、眼下に広がっていた美しい夜景に初めは言葉もなく見入った。街の灯りは暗闇の中で閃光を放つ色ガラスのかけらのように見えた。そんな情景にしばらく見とれていると、美しい夜景は夜空に輝く星の姿に重なった。

「漆黒の 闇に散らばる 色ガラス」(しっこくの やみにちらばる いろがらす)
「色ガラス 輝く夏の 星空に」(いろがらす かがやくなつの ほしぞらに)

あるいは、ふたつを合わせ、

「漆黒の 闇に散らばる 色ガラス
輝く夏の 星空に」という表現をすることもできる。

残念ながら、だいぶ使い古していた私のデジタルカメラでは、あれほど美しい夜景をうまく撮影することはできなかったけれど、あのとき見た夜景は、わたしの脳裏に生涯、去来するに違いないというほどの大きな感動を与えてくれた。



小樽公園内のツツジ
(写真提供・小樽ジャーナル)